

## 博士論文要旨

氏名	藤代（武知）優子
学位の種類	博士（人間科学）
学位記番号	甲第12号
学位授与年月日	平成24年3月16日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第5条1項の規程による
学位論文題目	職業的音楽家へのプロセス —プロへの移行期における課題とその対処、変化—

## 論文の要旨

音楽を職業として生きていくことは難しく、その理由として、安定した収入を得がたいこと、職としての需要が限られていること、その職業にたどりつく方法が千差万別であることなど、様々な困難が挙げられる。海外、国内で活躍できるトップレベルの演奏家や作曲家などをのぞき、それ以外の大多数の音楽の仕事に従事する人々は、正規雇用で安定した収入を得ていることは少なく、収入の面で恵まれているとは言いがたい。本研究では、幼少期から器楽教育を受け、現在職業的音楽家を目指している25～35歳の独身成人11名にインタビュー調査をおこない、その内容を質的に検討した。

研究1では、職業的音楽家を志すプロセスにはどのような課題や困難があるのかを、質的に検討することを目的とした。協力者の音楽歴の概観と、主に学校卒業以降の課題や葛藤の詳細に焦点をあて、インタビュー調査から得られたデータの分析をおこなった。その結果、学校卒業時まで、音楽を職業と結びつけて熟考できているものは少なく、学生時代の音楽に対する態度が受動的であることが示唆された。学校卒業後プロの領域に移行するにあたり、「職業としての音楽に関する情報の欠如」「否定的評価」「音楽でやっていく決心の甘さ」「アイデンティティの葛藤」「音楽的充実か収入か」「将来展望の難しさ」の6つの課題が抽出された。卒業時には、仕事内容や仕事の獲得方法など、職業としての音楽についての知識や情報が不足しており、職業生活へのスムーズな移行の妨げとなっていた。仕事を始めてからも、志の揺らぎや、否定的な評価を受けるといった困難が認められた。ある程度音楽の仕事が増加してきても、音楽以外の仕事とかけもちすることによるアイデンティティの葛藤や、音楽的充実感と収入をはかりにかけるといった葛藤が認められた。また、職業的音楽家へのプロセスの最終段階にあると思われた協力者であっても、音楽の仕事を経続した将来を展望することは難しく、音楽を目指す若者の人生設計が、大変不確実なものであることがうかがえた。

研究2では、研究1で抽出された6つの課題を中心に、その課題にどのような対処の仕方があるのか、この課題に直面せず問題なく通過できている協力者はなぜそうなったのかについて検討を

おこなった。また、研究1の協力者に4年の期間を経て再度インタビューをおこない、研究1で抽出された課題に対するフィードバックを得て、協力者の課題に対する考え方や対処の仕方の変化を検討した。その結果、「職業としての音楽に関する情報の欠如」に関しては、社会に出て仕事をするようになると、譜面通りの演奏以外の音楽上のスキルや、ジャンルに固執せず柔軟に対応する態度や技能、ひいては一般的な社会性やコミュニケーション能力が求められ、ソロ演奏一辺倒ではない仕事の多様性を認識することが必要とされていた。「否定的評価」では、評価の概念が変化し、結果的にこの課題から解放されている例などが認められ、対処法は「受容」→「新たな目標の設定」「内的基準重視、競争原理からの離脱」「演奏・才能評価の重要性の低下」という下位カテゴリーに分類された。「音楽でやっていく決心の甘さ」「アイデンティティの葛藤」「音楽的充実か収入か」「将来展望の難しさ」については、課題への対処やとらえ方を縦断的にもたどるため、協力者ごとに分析をこころみた。音楽の仕事と音楽以外の仕事とを兼業することが、アイデンティティの葛藤を生む大きな要因だと考えられたが、兼業状態であっても葛藤を抱えず両者をうまく循環させている協力者もあった。協力者の事例を縦断的に分析した結果、音楽の仕事の増加によりアイデンティティ葛藤が解消されたり、音楽以外の仕事への定着が進んだり、結婚観の変化により将来像が変化したりと、協力者の中での経時的変化も大きいことが示唆された。各事例により、アイデンティティの葛藤や、将来の見通しに関する、ひとくくりにはできない複雑さが示された。音楽的充実か収入かという課題は、最も多くの協力者に経験されており、音楽以外の趣味を持つことや、音楽を仕事とする意味の再構築などが対処法となっていた。

本研究において、個人の経験を扱い分析をおこなったことにより、音楽家の経済状態に関する統計的調査や、音楽専攻生、音楽専攻卒業生に対する質問紙調査などの量的研究結果の背後にあるいくつかの状態が明らかになった。研究1のプロセス図では、抽出された6つの課題を乗り越えながら前進し、音楽の仕事のみに従事する職業的音楽家に至るプロセスを想定した。しかし研究2において、初回から4年経てのインタビューを加え、各協力者の事例を音楽アイデンティティのタイプ別に縦断的に分析した結果、研究1で想定したプロセスに適合する協力者がある一方、このステップを踏みながら山を登るかのごとく音楽家に「成っていく」プロセスにあてはまらない協力者の存在があった。音楽と音楽以外の職とを両立する形を取り、そこに安定する協力者や、夢追い型フリーターにあてはまる音楽家の卵とでもいうべき状態から、4年経ても仕事量や質があまり上昇することがない協力者のケースがあった。華麗な経歴を持つわけではない音楽専攻卒業生という本研究の協力者にあっては、専門の充実度の高い音楽家を到達点とした収束的プロセスだけではなく、複数の形が存在した。最後に、研究1、2をふまえて、音楽家を将来の仕事の候補とする学生・若者への提言をおこなった。